



赤 城 山 観 光 情 報 紙

A K A G I F T

AUTUMN / WINTER 2021



特集 山に、生きる。

大沼のほとりで160有余年の歴史を誇る一軒宿 青木旅館

木がつなぐもの。

材木屋さんの工房で木工体験 / 2022年、白木造りの新鳥居をくぐる。
もしもBOX工房 / 三夜沢 赤城神社

おみぎと女塾 香雲堂 梅田店
はんなりと、乙女心をくすぐる和菓子店。

SlowWalk

どんぐりの世界へようこそ

山に、生きる。それは、人生の中心に山があり、そこでの暮らしが心の奥深くまで染み入るような生き方のこと。
今回取材したのは、まさに「赤城山に生きてきた」という言葉がびつたりな大沼湖畔の青木旅館の皆さん。代々赤城山と関わり、時代とともに変化しながら、現在も変わらず大沼湖畔で多くの旅人に愛されている。

山に、生きる。



昭和の初めの頃の青木旅館の人々

実り人プロフィール

青木旅館
#45 青木 留美さん
Rumi Aoki

青木旅館の女将。5代目館主青木崇の長女であり、6代目館主青木泰孝の妻。

実り人プロフィール

青木旅館
#46 青木 泰孝さん
Yasutaka Aoki

青木旅館6代目館主。
赤城大沼漁業組合組合長。
赤城山観光連盟会長。

実り人プロフィール

青木旅館
#47 青木 昭美さん
Terumi Aoki

都内の出版社に勤務した後、生まれ育った赤城山へ戻り、姉夫婦とともに青木旅館を盛り立てる。



機械を使った大沼での採氷の様子



大沼の水を保管した氷室。エレベーターで中に落としていた



ワカサギ釣りをする先々代女将青木つね。足元はブーツでなんとオシャレ

赤城山には7つの牧場があった。

赤城山で牧場といえば、レンゲツツジの大群落で有名な新坂平にある赤城白樺牧場。5頭の羊たちが草を食む姿が見られるこの牧場、2015年までは牛がいた風景を覚えている人もいるかもしれない。では、かつて赤城山山頂の大沼湖畔全域が牧場であり、そこから裾野の国立赤城青少年交流の家あたりまでに7つ程の牧場があったことはご存知だろうか。



青木泰孝さん

大沼のほとりで160有余年の歴史を誇る一軒宿、青木旅館6代目館主の青木泰孝さん、そして幼い頃からそこで生まれ育ち、姉夫婦と共に3人で長年、宿を切り盛りする青木昭美さんに話を伺った。

「先祖が、安政4(1857)年に前橋藩から牧監と呼ばれる牧場の管理を任せられ、万延元(1860)年に牧監及び山番として、沼尻といわれる大沼のほとりに住居を構えました」と説明してくれた泰孝さん。牧場の管理をすることで、山を往来する人々との交流も自然と生まれた。「赤城越えの旅人の往来が増え、天候の急変や日暮れにより寝泊まりさせたのが旅館のはじまりでした。明治8(1875)年より本格的に旅館業をはじめ、現在の青木旅館がスタートしたんです」と続ける。

大沼や白樺牧場のあたりは「夏牧場」と呼ばれ、5月8日に行われる山開きの頃から10月中旬まで放牧した。葉が色づき、秋が深まりはじめると、国立赤城青少年交流の家があるあたりの松山牧場、通称「里牧場」に牛たちを移したそう。

昭美さんは、幼心に覚えていた風景を次のように語ってくれた。「昔は大沼周辺でも野焼きをしていたそうです。高木が少なかったので、眺めがすごく良かったんです。新坂平の方から登ってくると、大きなカーブのあたりでぱーと前が開けて湖が見渡せ、それはそれは綺麗でした」。話を聞くだけで鳥肌が立つような美しい風景をイメージできるから不思議である。

冬の大沼がもたらす“恵み”。

大沼周辺は、厳冬期にはマイナス15〜20度になることも。大沼が見事に雪と氷に覆われるのだから、風が強ければ震え上がるほどの寒さだ。1月中旬から3月にかけて全面結氷する大沼。明治から大正期、大沼の天然氷は、東京・横浜方面からの需要が高く、青木旅館では切り出した氷を馬を使って熊谷まで運び、その後鉄道の開通で前橋から列車に乗せて上野へ。さらに京浜方面まで販路を延ばしたという。「採氷は明治11年に2代目の館主だった平七がはじめて、のちに平七の次女で3代目館主となったあいが沼尻冷蔵庫を経営し、大変立派な設備で、蚕種の貯蔵もしていたと聞いています」と昭美さん。

今は跡形も残っていないが、日光や秩父と同様に氷室が赤城山にもあった。湖から切り出した氷を氷室に入れて一旦保管、その後鉄索道を通して桐生方面から東京へ運ぶルートもできたそう。

昭和30年代になると、冬の大沼は採氷からレジャーの場へと大きく変貌した。現在、氷上のワカサギ釣りやスノーシューなどが楽しめるが、昭和から平成にかけてはスケートが人気を博した。昭和32(1957)年に「大沼スケート場」がオープン、1960年代のピーク時には、なんとシーズン中の数カ月で12万人の人数が出た。約四半世紀の間、天然のスケートリンクで遊べたなんて、ある意味“贅沢”そのものである。赤城山には3カ所のスキー場があり、そのどこもが大いに賑わった時代と重なる。

では、ワカサギ釣りはいつ頃始まったのかを泰孝さんに伺ってみると「もともとは大正時代には鱒の養殖をはじめていて、ワカサギはそのエサだったようです。時代とともに鱒の養殖は役目を終えたのですが、ワカサギは釣り客の楽しみとして残りました。昭和16(1941)年に始まって、戦争で一旦中断した時もありましたが、昭和23(1948)年に再開して、現在に至りますね」とのこと。時の流れの中、変わるものと変わらないものが、ここ赤城山でも色濃く映し出されている。



新坂平に放牧されていた牛。もともとは前橋藩の藩管事業として嘉永4(1851)年に中腹の箕輪で放牧がはじまった



大正時代の青木旅館



明治時代の青木旅館

青木旅館
知られざる
エピソード



お米が不足だった戦後は配給制度があって米1合持参で1泊といった風になっていたそうです。お米がない人はジャガイモやサツマイモでもOKだったようです。

名だたる文人が赤城山を訪れた。

明治以降、赤城山には多くの文人や芸術家たちが訪れている。朝夕いつ眺めても神秘的で、それでいて懐深く、裾野が美しい赤城山に魅了されながら、彼らはここに静寂を求めたのかもしれないし、より一層の思索を深めたのかもしれない。

赤城山そのものを題材として歌や詩、紀行文、絵画などが次々と生まれた。

昭美さん曰く「今、赤城山へはマイカーやバスで来るのが当たり前ですが、明治の頃は前橋駅から歩いて赤城山まで登ったんですよ。日本の代表的な歌人として誰もが知る与謝野晶子と夫の鉄幹は裾野三里といわれる道のりを、子供を背負って登って来たとか」と教えてくれた。調べてみると、与謝野晶子が夫の寛(鉄幹)とともに訪れたのは夏の2回とされている。一度目は明治38(1905)年8月、それから29年経った昭和9(1934)年7月に赤城山を訪れている。一度目は2人が結婚して4年後のことであり、豪雨の中、幼子2人を連れて夫婦の他に子守の者を含めて複数名で必死に登る様子を、晶子が『雑記帳』に克明に記していた。二度目は寛(鉄幹)の亡くなる前年であった。宿泊先はいずれもこの青木旅館。その時の自筆短歌は、大

切に保管されている。

若き日の高村光太郎もまた山頂に訪れて絵を描き、歌を詠んだり、学生だった芥川龍之介は赤城山に訪れた時の様子を友への手紙に綴ったりした。志賀直哉について言えば、ひと夏の滞在中に執筆したほか、下山後も赤城での生活を描いた作品を残している。

“全山冷房”の絶好の避暑地

文学者や芸術家が数多く訪れるなど、かつてから避暑地としてのポテンシャルが高かった赤城山。昭和の半ばに入ると、いわゆる上流階級の避暑地として好まれた。昭美さんは当時のことを覚えている。カナダ大使館に勤めるご家族や日本橋の材木屋さんのご家族など、都内から毎年数家族が1カ月ほど青木旅館に連泊していたという。それこそ、ヨーロッパのパカンス的な過ごし方に近いのかもしれない。「1カ月の滞在といっても、旦那さんは仕事があるでしょ。土曜日に来て、家族と過ごして、日曜の夜には東京に戻って行って、平日働いて、また週

末になると赤城山にやって来る。お年寄りや奥さんと子どもたちは夏休みを涼しい赤城山でゆったりと過ごすんですね。軽井沢の別荘ブームはその後に起きたと思うの」と昭美さん。標高1350mに位置する大沼湖畔は都心とは10度以上の気温差で実に涼しい。戦後は西洋音楽が流行り、ラッパの付いた蓄音機で音楽を流しながら、ポンポン船が大沼をゆったりと走る。そんなのどかな風景も見られたそう。その後、スケートブームと重なる頃の赤城山観光人気はすさまじいもので、昭和の末までボートや遊覧船の乗船待ちの行列が絶えなかった」と泰孝さんは言う。

先人達の過ごし方を取材していると、赤城山は長期滞在に非常に向いていたことが分かってきた。山頂までアクセスしやすく、移動に時間を取られないのも魅力的だ。日帰りでももちろん楽しめるが、宿に泊まれば趣味に没頭する時間もさらにたっぷり取れるだろう。釣り、散策、7つの外輪山で登山に汗を流すのもいい。近年、大沼へのカヤックやカヌーの持ち込み利用もOKになり、遊びの幅がより広がった。何より、早朝や夕暮れ時、また星空など、言葉では言い表せないほどのプレミアムな景色に出会えることも楽しみにしたいところだ。それを物語るかのように、昭美さんのスマホにはカメラマン顔負けの絶景がいくつもおさめられている。



青木 昭美さん



晩年の与謝野夫妻(昭和4年)
「冬柏」第6巻第8号より
(画像提供／群馬県立土屋文明記念文学館)



昭和10年頃の青木旅館。多くの文化人が宿泊した



先代崇兄弟は赤城山の親元を離れて前橋の家から学校へ通った。休暇を終えて前橋へ戻る道のりは馬を利用。番頭さんが手綱を引いて行った



素晴らしいフォームでスケートの滑走を楽しむ人々



赤城山で生まれ育った人は皆スキーが上手かったそう

参考文献:『第57回企画展 今日赤城が見える一風の山 文学紀行一』(発行 群馬県立土屋文明記念文学館)

『写真集 富士見村制百年のあゆみ』

参考ホームページ: 青木旅館ホームページ「旅館の歴史」<https://www.aokiryokan.co.jp/history/>

青木旅館
知られざる
エピソード



赤城の女性たちは、強く、賢く、たくましい。3代目当主のおあいさんと呼ばれた女性も、赤城山から前橋に行く途中で山賊に会い、馬で逃げ切ったがそれ以来護身用にブローニングというアメリカ製の6連発銃を帯に忍ばせていたとか。

赤城山の魅力を、そのまま映したかのような宿。



玄関入ってすぐ。格調高い応接間



ベテラン料理長による地の食材をふんだんに使った夕食



160年を超える長い歴史がありながらも、気さくな雰囲気、訪れる人をリラックスさせてくれる



黒檜山と大沼に臨む客室

黒檜山から切り出してきた木が柱に。

「この柱も床も、黒檜山から切り出してきた木を使っています」とおっしゃる青木旅館の女将さんの青木留美さん。それも一種類の木ではない。玄関入ってすぐ目にとまるのは堂々たる太い梁、これはサワグルミの木だという。支える柱はクリの木。奥までずっと続く廊下は、ミズナラの木だ。赤城山最高峰、黒檜山の木をここまでふんだんに使っていて、実際に泊まることができる旅館は、青木旅館以外にはないと断言してもいいだろう。昭和28年、建設当時のレトロで優雅な雰囲気、醸す美しい建具や照明にうっとりしながら廊下を歩くと、「床は米ぬかを使って磨いていた時代もありました。虫がつかないという効果もあったんですよ」と言う、留美さん。2階へとつながる階段は、カエデだ。階段の上を見上げると、ちょっと風変わりなオブジェが。荷車の車輪のようだ。「これは私の父である先代の青木崇が、大工仕事が好きで、あちこち手を加えたんです」と懐かしむようにほほ笑んだ。明治から続く歴史を紡いできた宿だからこそ、そこかしこに宿の歴史が刻まれ、思い出に包まれている。



青木 留美さん

建物だけではない。宿と言えばその旅館の要の一つにもなる料理にもこだわる。板前の須田さんは10代から住み込みで働いていて、もう半世紀以上になるという。「別の旅館やホテルで修業してきた味ではないんです。先代の女将サキが代々受け継いできた味を板前にじっくりと手ほどきし、そうやってここだけの味を守ってきた」。宿を手伝ってくれる女中さん達も、何十年と通っているベテラン揃いとのこと。

「年々益々、赤城山が好きになるわね」と互いに頷きながら赤城山への深い愛を伝えてくれた姉の留美さんと、妹の昭美さん。「赤城山は素晴らしい自然以外、いい意味で何もないんです。ここに来ると何もなかったからこそゆったりとした時間が過ごせる。それこそまさにスローシティだと思います」と締めくくってくれた泰孝さん。一過性で楽しませるようなものは、たしかに赤城山の山頂にはない。けれども、じっくりと腰を据え、人生の醍醐味を味わい尽くすような過ごし方ができる。それが赤城山である。



電気が通るまでは各部屋で使っていたランプ



プライベート感たっぷりの離れ「樹林」。赤城山の大自然がより近く感じられるロケーション

青木旅館

前橋市富士見町赤城山8

TEL 027-287-8511

<https://www.aokiryokan.co.jp>

＼ぜひはこすら！／



木がつなぐもの。



家を作るのが大工さんだとすると、その大工さんをサポートするのが材木屋さんの役目。赤城南麓の一等眺めの良いロケーションに位置する石橋製材所は、創業昭和51年の赤城南麓で3代続く老舗材木屋さんだ。家づくりの要となる梁や柱などを中心に様々な材木の加工を請け負っている。山から切り出してきた丸太の中には8mを超えるものもあり、他の製材所では加工が難しい場合でも、「石橋さんならば」と次々と相談や注文が舞い込んでくる。

石橋製材所の3代目を継ぐ石橋一紘さんは、一般消費者の方との接点づくりとして2020年秋に「もしもBOX工房」と名付けた工房を開いた。そのきっかけは、時折ある一般消費者からの加工の相談だった。たとえば、し

なってしまった木のテーブルを平らにできないかという問い合わせなど、加工に関する多種多様なもの。その都度親身に対応し、お客様に喜ばれてきた。石橋さんは、新たに作った工房がものづく



実人プロフィール

石橋製材所
#48 石橋 一紘さん
Kazuhiro Ishibashi

祖父の代から続く製材所の3代目として毎日奮闘中。物心ついた時から跡を継ぐことを目標に、大学時代は建築学を学んだ。2児の父でもある。

初心者、手ぶらOKで製作体験
「もしもBOX工房」で
手作りブックスタンドを作ろう！

鉛筆で引いた線に沿って
糸鋸を動かします。真剣そのもの！
ゆっくりすすむ、木のミシンって感じ♪
小学校低学年でも十分頑張れる。

糸鋸の作業が
大変だったけど、
面白かった！

気に入りの絵本を
いれようかな

完成！

小学3年生と1年生の2人で約2時間、楽しみました。



どの木にも年輪がある。木は、時間をかけてじっくり“木”になる。また、同じ木に見えても一本一本すべて違う。人の成長もそうであり、1人ひとり個性が違うということも同じだ。

私たちは無性に木に惹かれる。それはどこかで自分を重ねているからかもしれない。木のまわりでは自然と物語が生まれる。今回、その現場へ足を運んだ。

木で作る。有限会社石橋製材所

有限会社石橋製材所
もしもBOX工房
前橋市苗ヶ島町1872-6
TEL.027-283-4329
http://ishibashi-seizaisho.com



りの拠点となり、一般消費者と職人の方との交流の場となるようなイベントの企画も目下思案中だ。

工房を利用する際には、作業のサポートや加工依頼には別途費用がかかるが1人でもグループでも1時間わずか300円(税別)という低価格で利用できる。もちろん木材購入可能で、材料持ち込みもOK。

「なかなか自宅で作ってみたいと思っていても、道具を揃えるのは大変だったり、場所もないという方も多いと思うので、ここなら気軽にはじめられるし、製作に没頭してもらえるはず」と語る石橋さん。加工に必要な道具は、日本製から海外製まで豊富に揃えてあり、たとえばサラダボウルや椀、ブックスタンド、まな板、カッティングボードなど、思い思いに「世界でひとつ」の自分の作品を作ることができる。工房は製材所がお休みとなる土日を中心に予約を受け付けている。

製材所の一角というスペシャルな空間で、「もしもこんなのが出来たら」と湧き上がるアイデアを自由に表現し、形にしてみてはどうだろう。



2
中盤、電動ドライバーでビス打ち！最初はおそろおそろだったけど、数本やったら力の入れ具合が分かってきた。



3
終盤、創作に慣れてきたのか、ここでグッドアイデアが浮かぶ。切って余った木片を使って仕切り板を製作。ヤスリをかけて、断面をなめらかにします。「黙々とやる作業が楽しくてハマっちゃう」。

木に込める。

三夜沢 赤城神社

2022年、白木造りの新鳥居をくぐろう。

もしもBOX工房を運営する石橋製材所は、地域を代表する三夜沢町の赤城神社に、新たに建て替えられた白木鳥居の建設にも携わった。

「たわら杉」と呼ばれる樹齢1000年を超える3本の杉の木などが林立する境内から新たな鳥居となる木を切り出す。石橋製材所の石橋福栄社長と、前橋市内で銘木を取り扱い、特殊伐採を得意とする中澤木材の中澤伸之社長が中心となって木の選定を行い、境内の中から駐車場裏手にある樹齢110年ほどの4本のスギの木に“白羽の矢”を立てた。

2021年9月7日の伐採当日は、東京から招いた「空師」と呼ばれる専門家も加わる。「空師」は、自らの足で木に登る。中澤社長曰く「命綱はつけるものの、高さは約18mにも及び、まさに“空で仕事”をするプロフェッショナル。木を倒す方向を確認して、余分な枝を切り落とすなど

の実作業を行う」。綿密な計画は当然のことながら、一発勝負の大仕事。長年の経験が頼りになるに違いない。

老舗の材木屋さんだけあって、広い敷地をもつ石橋製材所が4本のスギの木の搬出先だ。丸太を一から加工する、皮むきや刻みと呼ばれる作業に入る。「少数精鋭、2名の大工が担当しています」と話すのは、桐生市新里町の草処建設の草処晋一社長。「境内にある木はすべてがご神木。決して失敗は許されせんから」と表情を引き締める。「赤城神社の鳥居は、伊勢神宮の鳥居とほぼ同じ形なんです。釘や楔などを一切使わずに木を組み合わせて仕上げていくんです」との説明が。最上部にあがる「笠木」と呼ばれる部分は阿サイドの柱より長く、12mを超える。地元企業3社による連携プレーで、10月半ばには仮組みといわれる作業も無事完了した。

「今回の鳥居の建て替えは、生前の父の願いであり、私にとっては大きな宿題でした。地元の建設会社や製材所の皆さんに声をかけ、今回境内の木で新たな鳥居を立て替えが実現しま

LIXILリフォームショップ
草処建設
桐生市新里町新川2130-1
TEL.0120-44-1682

有限会社中澤木材
前橋市馬場町126-3
TEL.027-283-8863

実人プロフィール

草処建設株式会社
代表取締役社長
#50 草処 晋一さん
Shinichi Kasadokoro

「新里太鼓どころ」会長。毎年苗場ヘスキーや、北海道まで鮭釣りに行くなど多趣味。



大工
木村 滋さん
Shigeru Kimura



大工
小沼 良光さん
Yoshihiro Konuma

大工として家づくりなど経験を積んできましたが、当然のことながら鳥居を作るという仕事は、はじめてです。携われること自体、大変光栄なこと。緊張感を持って取り組んでいます。

丸太と丸太を組んでバランスをとる作業を、専門用語で“ひからせる”というのですが、この作業は非常にやりがいがあります。ピッ

タリと合わさった時の達成感は格別です。また、木は生き物ですから、南に向いている面を合わせないだけでも狂うものになります。ですからその場に生えていたまをなるべく再現して建てるのが大事ですね。

無事成し遂げて、大勢の参拝客の方々に見上げていただけたら本当にうれしいです。

実人プロフィール

赤城神社宮司
#49 眞隅田 吉行さん
Yoshiyuki Masuda

会社員を経て一念発起し、大阪國學院で神道を学ぶ。28歳で赤城神社の権禰宜となり、父の跡を継いで2020年から現宮司。

詳しくはこちら！



三夜沢 赤城神社
前橋市三夜沢町114
TEL.027-283-1268

した」と感慨深い顔で話してくれた眞隅田宮司。前回の鳥居に使われていたスギの木は、参拝客の方々などに少しずつ手に渡るよう、おみくじなどの様々な形で考案中だそう。

地域の人々に守られ、観光客にも愛される三夜沢の赤城神社。参拝客がいつ来ても懐かしく感じる場所、そんな“変わらない神社”であり続けるためという思いを感じた。

新しくなった白い肌の鳥居をくぐり、境内の杜へ。新しい鳥居のこれからを見守っていきたい。



形と模様は開けてのお楽しみ。
「古代瓦煎餅」



みんな大好き
「どらやき」



ぎっしりのつぶあんが
おいしい「霧溪最中」



あかぎこ女塾
Lesson9

はんなりと、乙女心をくすぐる和菓子店。

日本には四季がある。移ろいゆく様が美しく、人々を魅了する。桐生市の和菓子職人・小泉慶太さんが作る和菓子は、まさに移ろいゆく四季のようだ。10月中旬の取材時に会ったのは、「深山の錦」と名付いた3種の生菓子。「和菓子は作り込みすぎないことが大事」とおっしゃるそれは何とも愛らしい佇まい。ひとしきり愛でてから口に運ぶと今度は脳裏に実りの秋の風景がパッと広がる、そんな奥行きがある一品だ。毎週木曜日に2種のお菓子を入れ替えるそうで、来店する度に一期一会の出会いが待っている。

生まれは桐生、大学時代から京都で経営学を学び、在学中にお茶の作法も身につけたという小泉さん。卒業後は和菓子の名店で5年間修業し、2010年より独立して地元桐生へUターン。もともと、祖母の代から続く老舗和菓子店「香雲堂」の長男であったが、意外にも子どもの頃はあんこが苦手だったため、跡継ぎに

なるとは想像もしていなかったとのこと。それが今では「あんこ作りにもっともこだわりが」とにっこり。良質な国産小豆をベースに上白糖、白双糖、黒砂糖などを使い分け、つぶあん、こしあん、白あんを、1日1種類、それぞれ週に一回、じっくりと製餡する。そんな小泉さんが作るあんこのおいしさを十分に味わいたいなら、定番の「最中」や「どらやき」がおすすめだ。上品で優しい甘みのつぶあんは、絶妙な粘り気、さらに小豆の粒が小気味良いアクセントとなっている。

小泉さんは、和菓子を軸にして、茶道のほか、山野草などにも造詣が深い。店先には可憐な草花が咲き、さりげなくお客様の心を和ませる。聞けば、桐生へ戻ってから赤城山の地蔵岳や尾瀬など、中学時代の恩師とともに登り、そこで山野草の知識を深めていったそう。

「すべての道は和菓子に通ず」。そんな言葉がピッタリと当てはまるような、小泉さんがこれまで歩んできた道のりに感嘆せずにはられない。

香雲堂 梅田店
桐生市梅田町一丁目640-3
TEL.0277-32-2861
営業時間 10:00~17:00
定休日 水曜日
<https://www.koundo-kiryu.jp>

\詳しくはこちら!\





店舗内には茶室が2部屋あり、お抹茶とお菓子や、夏季限定のメニューをいただける。茶室利用は事前に電話でご予約を。



夏季限定のかき氷「抹茶白玉小豆」





華やかな「深山の錦」。しゅっと溶けるような口当たりのこしあんが中に。





Slow Walk

身近で奥深いどんぐりの世界

文・写真 サンデンフォレスト 山田 裕久



誰もが一度はどんぐり拾いをしたことがあるのではないだろうか。

どんぐりとはブナ科に属する樹木の硬い木の実(堅果)をまとめた呼び名です。秋の味覚であるクリもどんぐりの仲間といえます。日本に自生しているどんぐりは、ブナ科の5属22種類、調べてみると世界には900~1000種類あると言われ、世界最大級のどんぐりは手のひらが隠れるような大きさで、メキシコやボルネオ島で見られるそうです。(いつかは見に行きたいです。)

さまざまな落葉樹が生える赤城山はどんぐりの宝庫で、ミズナラ、コナラ、ヤマグリなどが多く、街の公園などではマテバシイ、スダジイ、クヌギ、シラカシ、アラカシなどがよく見られます。落果する時期はどんぐりによって様々で、9月中旬から11月上旬までツヤツヤのどんぐり拾いを楽しむことができます。

どんぐり拾いをしたあと、家で保管していたら、虫が出た!という体験をしたことはありませんか。その虫の正体は、ゾウムシといわれる昆虫の仲間たち。どんぐりがまだ

緑色の柔らかいうちに、穴を開け、産卵管から卵を産みます。幼虫はその後、土の中で越冬するので、卵の入ったどんぐりは、お母さんがノコギリのような口で「チョッキリ」と枝と葉っぱごと落とします。緑色のどんぐりと枝葉と一緒に落ちていれば、このゾウムシたちの仕業です。

クラフトワークに使うなど、どんぐりを保管しておくためには、①熱湯消毒や、②冷凍処理をすると安心です。

せっかく拾ったどんぐり。クラフトワークに使うほか、実は食べて楽しむこともできます。

10月上旬に、どんぐりでクッキーを作りました。使った種類は前橋市内の公園で拾ったマテバシイ。落ちたばか

りの艶があって、色合いが良く、新鮮などんぐりを使うことがポイントです。他にもスダジイなど、シイの木の实ならばどれもおいしいと思います。

おろし金で粉状にしてから、炒ったものを生地に練り込みます。「香ばしいクリ」のような味で、香り高いのが特徴です。素朴な味わいで十分おいしいのですが、子どもたちと一緒に楽しむなら、クッキーの形やトッピングなども工夫すると楽しいかもしれません。

冬を前にした昆虫、野鳥、リス、クマなどにとっては貴重な食糧であるどんぐり。森からおすそ分けをいただいていることを忘れずに楽しみたいですね。



1 熱湯消毒

沸騰させたお湯で1~2分ほど茹で、その後乾かします。乾かすときは、野菜を干したりするときにつかうネットやカゴなどを使い、一面に広げるように干します。どんぐり同士が重なっていたり、何かに触れたりしていると、そこからカビやすくなるので注意が必要です。

2 冷凍保存

どんぐりを一晩、冷凍する方法です。手間が少なく簡単かもしれませんが。冷蔵庫から出した後は、結露して水分がつきますので、①と同様の方法で、よく乾燥させてください。

サンデンフォレストでも、時期(9~12月)になると、どんぐり拾いが楽しめます。

詳しくはHPより
<http://www.sandenforest.com/>



AKAGIFT 編集後記

特集の取材にあたって、ここに紹介しきれないほど、楽しいエピソードもたくさん伺いました。個人的には大沼の天然のスケートリンクが復活して、端から端まで滑走できれば気持ちいいだろうなあと想像しました。(取材班)

赤城山ツーリズム地元推進協議会

NPO法人 赤城自然塾

観光庁登録 観光地域づくり法人(DMO)

〒371-0231 群馬県前橋市堀越町1115 前橋市大胡支所内

TEL 027-212-2611 FAX 027-212-2691

<https://www.akagi-trip.com>



Information

AKAGIFT



AKAGIFTはクチコミサイト「ぐんラボ!」とコラボし、スポットの最新情報やクチコミをチェックできるようになりました! お出かけの際は各QRコードに、ぜひアクセスしてみてくださいね!